

P2-059

幼児期のミュータンスレンサ球菌定着に  
影響する生活習慣について

巻 竜也、岩崎 てるみ、梅津 糸由子、  
白瀬 敏臣、内川 喜盛

日本歯科大学附属病院 小児歯科

【目的】

幼児期のう蝕罹患状況の現状は二極化を呈しており、う蝕の無い幼児が増加している一方、低年齢から発症し、より重度化したう蝕を有する幼児も多数認められる。幼児期のう蝕発症はミュータンスレンサ球菌の定着時期やそのレベルとの関連性が強く、より早期の、またより高濃度の定着は早期発症と重症化をもたらす。そこで、本研究の目的は、幼児期のミュータンスレンサ球菌の定着に影響を及ぼす因子を確認するために、乳幼児期の生活習慣や口腔衛生習慣を調査し、2歳時と4歳時の唾液中ミュータンスレンサ球菌レベルとの関連性を確認することである。

【方法】

対象は、研究に同意し、2歳と4歳時に口腔内診察を受けた97人の幼児とした。う蝕の有無はWHOの基準に基づき検査し、う蝕の歯面数（dmfs）にて表記した。また、口腔内診察時に唾液中ミュータンスレンサ球菌（SMS）レベルを測定した。SMSレベル測定には、Dentocult® SM Strip mutans（Orion社）を用い、48時間培養後、表面のコロニーをモデルチャートと比較してレベルの低い順からScore 0～3の4段階で判定した。さらに、2歳時に保護者を対象として、乳児期の食習慣、生活習慣、口腔衛生習慣などについてアンケートを行い、SMSレベルとの関連性を評価した。集計されたデータは、Mann-Whitney U-test、Wilcoxon signed rank test、Logistic regression analysisを用いて分析を行った。

【結果】

被験者のう蝕有病者率は2歳で24.7%、4歳時では46.4%であり、平均（S.D.）dmfsは2歳で0.98（3.05）、4歳時で4.77（9.22）で有意な増加を認めた。4歳時のSMSレベルは2歳時と比較してScore 2、3の高いレベルの割合が有意に高かった。また、4歳時にSMSレベル2、3の幼児はScore 0、1の幼児と比較してdmfsは有意に高く、SMSレベルとdmfsとの間に有意な相関が認められた。SMSレベルを従属変数とし、アンケート項目を説明変数としたLogistic regression analysisから「卒乳の完了時期」と「歯みがきの頻度」においてそれぞれ、1.2、0.3の有意なオッズ比が得られた。

【結論】

以上の結果から、早期のSMSレベルの上昇に「卒乳の完了時期の遅延」および「不十分な口腔清掃」との関連性が示唆された。

P2-060

社会的認知理論に基づく低年齢児対象の  
齲蝕予防教育への取り組み  
—保護者のアンケートからみた新たな齲  
蝕予防プログラムの評価—

村本 知歌子<sup>1</sup>、大場 英和<sup>1</sup>、三木 崇裕<sup>1</sup>、  
佐野 哲文<sup>1</sup>、荻原 孝<sup>1</sup>、佐野 正之<sup>2</sup>、渡部 茂<sup>1</sup>

<sup>1</sup>明海大学 歯学部 形態機能成育学講座 口腔小児科学分野、  
<sup>2</sup>あすなろ小児歯科医院

【目的】

最近の疫学研究では、低年齢時での乳歯齲蝕経験はその後の乳歯齲蝕発生のリスクを高め、さらに永久齲蝕になるきっかけになると報告されている。3歳以下の低年齢児に対する齲蝕予防は極めて重要であるにも関わらず、これらの小児に対する齲蝕予防は公的機関による健診とその後の保健指導やフッ化物歯面塗布などのプロフェッショナルケアが一部で、予防の大半が家庭での歯磨きを占めている。しかしながら保護者による低年齢児に対する歯磨きは実際のところ困難であり、十分な齲蝕予防効果は上がっていない。そこで、富山市A小児歯科医院では行動科学の一理論である社会的認知理論に基づいた齲蝕予防プログラムを考察し実践し成果をあげ始めている。今回演者らは、保護者にアンケートを行い、この予防プログラム（以下ジャングルクラブ）について検討を行い、若干の知見を得たので報告する。

【方法】

対象は富山市A小児歯科医院を受診し、調査について文書、口頭にて説明し、同意を得た保護者96名で、このプログラムに参加した小児の年齢、性別、兄弟構成、歯磨きや歯科医院への関心度などについてこれらの対象者に対し無記名自記式アンケートを実施した。なお調査期間は平成27年11月の1か月間行った。

【結果・考察】

プログラム参加者の平均年齢は4.4歳であり、初回時の参加年齢は2.4歳であった。男女比は男児46.9%、女児が53.1%であり、第1子が最も多かった。ほかの兄弟の参加傾向としては、弟が最も多く、過去の参加者の兄弟では姉が最も多かった。「ジャングルクラブ」を楽しみにしているかの問いに対してはとても楽しみにしているとの回答が67.0%と最も多く、「ジャングルクラブ」に参加して歯医者さんが好きになったかの問いに対しては、歯医者さんが大好きになったとの回答が68.1%を占めた。「ジャングルクラブ」に参加して歯磨きが好きになった44.0%、変わらないが56.0%ですべての小児がプログラムに参加したことで歯磨きを嫌がらなくなった。「ジャングルクラブ」に参加して家庭での様子に対しては家庭で歯医者さんのことを話すようになったとの回答が83.1%と最も多かった。これらの結果から、A小児歯科医院で行われている新たな試みである社会的認知理論に基づいた齲蝕予防プログラムは小児及び保護者に受け入れられ、小児の歯科保健行動の向上に一定の役割を果たしていることが推察される。